

『糞坊主』

作：渋谷悠　　原案：小島啓寿

(男、余った寿司を持って入ってくる)

いやーようやく帰った。いやだからあの坊さん。そうなんだよ、今の今までいたんだよ。

お前も最初の方ちょっと聞いてたろ？あれからもずーっとお布施の話。最近の若い人たちはねえ、仏さんに興味ないみたいでねえ、うちのお寺維持するの大変でねえ、ガタが来てるのに直せないんですわって、知らねえよ。2時間居座って有り難い話の一個も出てこない。葬式だつてのになんかご機嫌だし。

…あ、お前も思った？やっぱり念仏違ったよな？みんな思ってたらしくて、坊さんがトイレに立った隙にその話で盛り上がってさ、息は続かないし苦しそうに唱えるし、お布施の話だけ流暢なんだよ、もうふざけやがって。

やっぱ人の葬式やるのとはわけが違うね。飽きるほどやってきたから坊さん選びなんて簡単だと思ってたら、見事にババ引いちまった。れっきとした糞坊主。糞坊主ツモっちまった。

…でもまあ坊さんなんてろくなのいないよ。

先週請け負ったやつなんてさ、坊さんが喘息持ちで、煙があるとむせちゃうってんだ。そうなんだよ、もう向いてないんだよ、葬式って何から何まで煙だつてのに。だからお経の間お線香をこう自分の後ろで焚くわけ。それでも咳き込んだりして、なんかお経も止まっちゃって、そういうもんなのかどうか分からないからみんな動けない。しょうがないから俺がゆーっくりこうやって回り込んで、覗き込んだらさ、気絶して白目向いてた。

本当なんだよ。もう慌てて救急車呼んで、坊さん運ばれてった。

(男、笑う)

じゃあその後どうすんだって話だろ。お経は途中だし。

神様仏様あってあたふたしてたら、そのお寺さんには跡取りがいるってことが分かって、まだ20代で若いけど向こうもそりゃ責任感じててさ、やってくれることになったわけよ。

これがまーも一何も出来ない。

どこまでお経読んだか分かんなくなって止まるんだ。その度に戻って読み直すもんだから終わんない。でまたその母親が、坊さんの母親が、後ろの方に座って見てんだよ、心配して見に来てんだよ。

終わってからも謝りに来ちゃって「息子は大丈夫でしたか？お経長かったでしょう？読み直してたでしょう？」これには親族から文句ブーブー。授業参観じゃねえぞって。

それ以前にあんた泡吹いてた旦那さんに付き添わなくていいのかよ。

(男、笑う)

こんなに笑ったらバチが当たるかな。

(軽く天に向って) ごめんよ。

…いや、もうビールはいいや。なんだかんだで食う暇なくて、ずっと空きっ腹にビールだったから。お茶もらえる？

なんでしょーもないのばかりなんだろうなあ。

まあでもさ、色んなことがいっぺんに来る中で、坊さんがあんなだと「なんなんだ！」って捌け口になって、みんなして糞坊主だ糞坊主だって言ってるうちは捌け口があって、なんだか親父が死んだことを悲しむ暇がなかったよ。

あいつらわざとボンクラのフリしてくれてんのかね。

今ようやく、ちょっと、まあなんか、来てる。

…お茶は、後でいいや。

あのさ…手、握ってくれないか。